

吳見思の文章論

張 小 綱

一

吳見思について、張惟驥の『毘陵名人疑年録』に次のような簡単な記載がある¹⁾。

吳齊賢、六十、見思

生明天啓元年辛酉（西暦1621）

卒清康熙十九年庚申（西暦1680）

この記載によると、彼の名は見思といい、字は齊賢である。見思の享年は六十歳とするが、それは数え年であるため、実際の享年は五十九歳であつた。『史記論文跋』によると、吳見思には道賢という名前の弟がいる²⁾。

今年春、齊賢弟道賢來粵、而是書剗刪適成。樹因嘆曰：凡著述流通亦有機會、今書成、而著書者之同氣至、因無異於著書者之自至也、豈非齊賢以其生平精

意所寄、故冥護默贊、以迄於成。而復靈爽感通、俾其弟間關嶺嶠來、受此書於七千里外乎！

すなわち、吳見思の『史記論文』が粵（廣東）で刊行される際、偶然に彼の弟道賢も粵に訪ねて来たという話である。この道賢のことは吳見思の『史記論文・凡例』に「季弟道賢」と紹介している。すなわち吳見思の三番目の弟である。道賢については『明清江蘇文人年表』に二か条の記載がある。次に紹介しておく³⁾。

○ 清康熙十九年、武進吳闡思（道賢）以至廬山所得資料編纂『匡廬紀遊』一卷。闡思、中行孫。

○ 清康熙二十六年、武進吳闡思客王掇嘉興使院、交常熟王翬。『王石谷年表』 闡思所著還有『秋影園詩』總十二卷。

この記載によると、道賢も著書に『匡廬紀遊』一卷と『秋影園詩』十二卷ある。また、道賢の名は闡思で

あり、中行の孫と紹介されている。この中行とはどういう人物であるか。ちょうど同じ『年表』に吳中行についての記載もあるため、ここであわせて紹介しておく⁴。

○ 明嘉靖十九年、武進吳中行（子道）生。『毘陵名人年録』一 中行、性子。

○ 明萬曆五年、常州趙用賢、武進吳中行官北京、以維護封建禮法劾張居正不守制，同被杖六十，逐歸。

『湧幢小品』九

○ 明萬曆十一年、武進吳中行復職入京，馮夢禎與談翰林舊典，作『記衙門舊例』 『快雪堂集』四十六

○ 明萬曆二十二年，武進吳中行死，年五十五。中行所著有『賜餘堂集』十四卷。

『明史』卷二百二十九には吳中行の伝が立てられており、これらの文献の記載によると、吳中行は進士になり、編修の官を授かっている。萬曆五年、時の宰相である張居正の逆鱗に触れたため、杖刑を受け、官職を剥奪され、故郷に返された。萬曆十一年、吳中行は北京に戻り、右中允という官まで昇進したが、後に政争に巻き込まれ、萬曆十三年、復帰してわずか二年で引退した。死後、禮部右侍郎という官を授かった。

吳中行の『賜餘堂集』には「家慶圖記」がある。「

家慶圖記」によると、中行はその年四十九歳（これも数え年で、実際に四十八歳）であり、八男一女の子供、三人の孫を持つていた。次に整理して見よう。

長男雍，三十歳，萬曆十九年卒（『哭家兒文』）長

孫儼思，雍の長男。三孫（名前未定），雍の次男

次男亮，二十七歳

三男奕，二十五歳

四男元，二十四歳。次孫爾思，元の長男

五男京，十九歳

六男兗，十六歳

七男宣，十二歳

八男襄，十一歳

『明史・吳中行傳』には亮の名前だけが見え、「亮官御史，坐累貶官。終大理少卿。」と記載してある。孫の輩には三人の孫のほかにも、『賜餘堂集』には校正の仕事に携わる孝思、我思、賛思、何思、未思、貴思などの名前が見えるが、いずれも出世しなかったようである。「家慶圖記」を書いた六年後、中行が逝去した。それは吳見思、聞思兄弟が生まれる前のことであった。中行の逝去にともない、一族が凋落し始めたようである。

吳見思の父親は不詳であるが、おそらく出世しな

った。呉見思はそのような家庭に生まれた。しかしながら、「甲申之變」といわれる清朝の支配によって、当時二十三歳であった呉見思は科挙をあきらめたと推測される。従って彼はあまり裕福ではなかったようである。少なくとも彼は自分の著書を刊行する余裕がなかった。自分の著書を出版するために、呉見思は亡くなる前に生涯をかけて批評した『史記論文』の原稿を呉興祚に託したのである。その呉興祚については『清史稿』に彼の伝記が見え、その先祖は漢籍の正紅旗人である。彼自身は無錫の県知事になったことがある。その間、呉見思は彼についてよく旅をし、親交があった。呉興祚は経済的にも呉見思の面倒を見たと推測される。『史記論文』の前に刊行した『杜詩論文』にも呉興祚の序文がある。おそらくその本の刊行にも呉興祚が経済的に援助したであろう。

呉見思の著書は『杜詩論文』と『史記論文』があり、康熙十一年『杜詩論文』五十六巻が刊行され、康熙二十五年（1686）、『史記論文』が刊行された。『史記論文』の刊行は呉見思が亡くなって六年後のことである。「論文」という題目は文章を論ずるという考えによるものであろう。ただし、『杜詩論文』には「武進呉見思・齊賢注、宜興潘眉・元白評、武進董元愷・

舜民參」（二部は「武進呉九思・道賢參」と記しているため、呉見思の評点かどうかは疑問である。しかし少なくとも『杜詩論文・凡例』には「康熙壬子三月呉見思識」と書いているため、呉見思の文章と認めることができる。

呉見思の詩文批評は明代以来の詩文評点の流れ、特に孫月峰と金聖嘆の評点を受け継がれたものとして位置付けられる。従って小論では月峰と聖嘆の文学主張と比較して、呉見思は彼らの主張をどのように受け止め、どのように自分の文章論を展開したかを検証してみたい。

二

明の孫鑣（月峰）の『孫月峰先生批評史記』は明代の『史記』評点の集大成であり、後の『史記』評点に大きな影響を与えていた。呉見思も例外ではなく、『史記』を批評した際、孫月峰のことを強く意識し、その影響を受けた。具体的に言えば、主として月峰の「文簡」論の影響が見受けられる。（孫月峰の「文簡」論については、拙文『孫月峰の文章論』参照。関西大学『中国文学会紀要』第33号）『史記論文』の中には、

直接に孫月峰に言及した議論は二、三ヶ所ある。次に引用しておく。

○吾讀孫月峰批評，每嫌史公此篇刪改左傳佳語，不知左傳逐篇立格，故易好。世家包羅衆事，爲難工。何也？世家事多，故不得不刪煩就簡，一也。且事多則左不盡載，欲句句學左則不能。若一段左傳文法，一段史公筆仗，則挾插難看，故不得不改削以就我，二也。月峰此言亦未爲設身處地耳。（晉世家）

○初讀曹相國世家，鋪序處覺文法一新，耳目頓異。及至樊鄴滕灌列傳，亦有作法。此傳平直無奇，不覺積習生厭矣。孫月峰以其有吏牘意，亦似脚色供狀，誠然也。（傅靳蒯成列傳）

○孫月峰云，篇中以十五天下字，十三足下字，四先生字，十一陳留字，十四沛公字若故重之以見奇。（鄴生陸賈列傳）

『晉世家』の例については見思と月峰とで意見の食い違いがあるようだが、見思は「刪煩就簡」と主張しているため、月峰の「文簡」論と原則的には同じである。『傅靳蒯生列傳』の例については、見思は最初『曹相國世家』『樊鄴滕灌列傳』の作文法は面白く思ったが、『傅靳蒯成列傳』の作文法は平凡で（平直無奇）

嫌いであった。しかし月峰の批評を見ると、「吏牘意」という新味があるとの見解に納得できた。『鄴生陸賈列傳』の例については見思が月峰の字法の批評に賛同している。

呉見思は『史記』の体裁について「簡」の必要性を次のように説明している。

○本紀是提綱之體法，不得詳序，詳序便累贅矣。其中必插列國事相照映者，正與周紀諸世家扭成一片也。（秦本紀）

○世家序事，總用簡法。此篇只於會夾谷處、學琴處、困陳蔡處，著意寫，而其大段則枝葉扶疎，根株盤錯，不必討好。而體局自大。（孔子世家）

要するに、呉見思は本紀と世家には「簡法」を取らざるを得ないという。この解釈が正しいかどうかは別の問題として、体裁の角度から「文簡」論に客観的解釈を与えようとしたのは見思の意図であろう。『史記』の体裁については、見思はさらに世家と列傳との相違点を次のように説明している。

世家之體與列傳不同。列傳止序一人或數人，故搏撓爲易。世家則於一篇之中，上下千百年，既以一國之事詳載，更或他國之事互入，不得不用簡法。故左國所詳，此則甚略；左國藻麗，此則簡淨。局于編幅，

不得不然也。故爲世家者，另有一副筆仗。讀世家者，當換另一副眼光。無作矮子觀場，隨人笑語也。（齊太公世家）

しかしながら、見思の世家についての解釈は一理あるが、月峰の「文簡」論は文章全体的最高理念であつて、一部の体裁限定されるものではない。換言すれば、「文簡」をせざるを得ない（不得不然）ではなく、しなければならぬということである。見思の解釈は明らかに狭い範囲に限定されている。

なお、孫月峰と同じように、「文簡」という目的のために、見思も「裁」という手段を重視している。たとえば、

世運至周，文盛事煩矣。乃八百餘年，收於丈尺之簡牘，而或煩或簡，或正說，或倒序，或自出己裁，或泛引他書，（中略）前段引尚書古奧離奇，後段引國策，流利簡淨。而刪裁之中，自出手眼，所當細看。（周本紀）

とある⁹。ここでは「剪裁」の理由が二つ示されている。その一つは「事繁」であり、すなわち歴史が長く、事柄が多いためである。もう一つは「文繁」であり、すなわち使用した大量な史料の記述が煩雑であるためである。『周本紀』について言えば、周王朝の歴史は

八百年余りあり、その間の事柄をすべて記載するのは無理がある。従つて吟味したり、選別したりする必要がある。また、引用した『尚書』、『國策』の吟味や選別だけではなく、字・句の削除や文章の作り直しもなくてはならないという。

ところが、『周本紀』と似通つた議論は列傳にも見られる。次に二、三の例を見てみよう¹⁰。

○國策語尚繁，以下說六國事多，先以此作引子，故不得不簡也。（蘇秦列傳）

○取債一段刪改國策，各有佳處，對看自見。（孟嘗君列傳）

○此傳史公剪取戰國之文，故另是一種筆仗。純以姿致風度爲妙。絕無粗疎生矯之態，讀之覺和易近人。

（平原君虞君列傳）

これらの議論を見る限り、見思は必ずしも「文簡」を「本紀」や「世家」に限定していない。むしろ一般論として考えている。見思は、

作文家要忍於割捨，若貪於使事，便爲事累矣。今人作碑誌者，纖微必載，夫豈有好文也哉！（衛將軍驃騎列傳）

と述べている¹¹。見思には論理の一貫性が欠けていたが、「列傳」について基本的に「文繁」という理由で

「剪裁」の重要性を主張している。

ところが、どのように「剪裁」をすれば、簡潔な文章を作ることが出来るであろう。これに対し、見思は「頰上三毛」の論理を打ち出している。¹²

○一束。兩段歸功太公處，俱約略虛寫，所云頰上三毛，取其意思所在而已。（齊太公世家）

○寫絳侯聞說即危懼處下獄，不知置詞處，出獄自嘆處，俱得本意。故絳侯大功，在誅諸呂，立代王一節，乃反不明序，猶寫真者，在頰上三毛，而不在面目軀體也。此文章家剪裁之法，如登山取仄徑，觀美人看鬢雲蟬鈿耳。操翰者不可不知。（絳侯周勃世家）

「頰上三毛」という出典は『晉書』列傳第六十二の顧愷之に見える¹³。すなわち本来は人間の頰にある三本の毛という意味であるが、人間の特徴のあるところを比喩している。作文の場合は、簡潔な文章を作るために材料の取捨は言うまでもなく、人物やストーリーを説明できる特徴のある材料を扱うことの大切さを指す。それはすなわち文章にとつての「頰上三毛」である。このような批評は『史記論文』の随所に見える。たとえば、

○范蠡略其大事，反以少子殺人一段作致，節節頓住，

語語不了，後乃一瀉即明，益見其妙。（越王勾踐世家）

○此兩傳俱用一樣筆法，相對前邊戰功，一頓點過。白起只抽長平一事，王翦只抽破楚一事，姿態色澤，抑揚變化，各臻其妙。（白起王翦列傳）

との例がある¹⁴。范蠡は越王を補佐して、亡国の越を見事に復興させた立役者の一人である。それにもかかわらず、司馬遷は越王勾踐の伝記の中で少しも蠡の功労を述べず、却つて蠡の息子が殺人の罪を犯したことを記し、暗に後の蠡の隠遁を示唆している。隠遁ということは蠡の計算づくという策士の一面をもつともよく示しているからである。白起と王翦は共に戦国時代の名将であり、戦功が数え切れない。しかし、白起伝記の中には長平の戦のみ、王翦伝記の中にも楚国破りの戦しか紹介されていない。というのは二つの戦が二人にとつて生涯の最も輝かしい戦果であり、二人の軍事才能を示した例だからである。

見思は「剪裁」を唱えると同時に、文章が自然であることを強調する。かれは「有意無意之間」という言葉を使うこともあるが、「絶無痕跡」という表現をより好んで使用している¹⁵。

○項羽每事爲一段，插入合來，猶好下手。高紀則將

諸事紛紛抖碎，組織而成。整中見亂，亂中見整，絕無痕跡，更爲難事。（高祖本紀）

○呂氏一紀中，附孝惠。兩少帝，三朝，及高祖諸子，七王與諸呂之事叢雜糾紛，幾於無處下筆。偏能一手握管，拈一頭，即放倒一頭，放一頭，即另起一頭，憑他四面而來，我能四面而應。且脈絡輪灌，章法蟬聯，絕無結撰穿插痕跡，可謂鬼神於文者矣。（呂后本紀）

文中の「紛紛抖碎，組織而成。」や「拈一頭即放倒一頭，放一頭即另起一頭。」は「剪裁」、すなわち文章を組織する工夫にあたる。その「剪裁」の結果、文章は少しも人工的な痕跡が見えない。これは誠に至難のことであり、神技といえる。

注目すべきことは、見思の議論には月峰の「文簡」論の根幹と言える「精嚴」「腴」「鍊」などの評語が殆ど見られない。これは二人の大きな相違点と言えよう。明代には「精嚴」「腴」「鍊」などの言葉が八股文の批評にもよく使われ、八股文作文における重要な概念であった。もともと明代における史書の批評は科挙の勉強、特に八股文を意識したものであり、月峰の批評も例外なくその土壌の上に立つものである。しかしそうした態度は見思の批評には殆ど見られない。従って当

然ながら八股文作文に関わる用語も殆ど使われなかった。それは清人における史書批評の一つの意識変化である。すなわち史書の評点は必ずしも科挙や八股文を意識するものではないのである。

三

一方、呉見思の文学批評においては金聖嘆の名前は見当たらない。しかし清代には見思はすでに聖嘆文学批評の後継者の一人として見なされていた。たとえば、清の寥燕は『金聖嘆傳』の中で次のように書いている。¹⁶

先生歿，效先生所評書者，如長洲毛序始，徐而庵，武進吳見思，許庶庵爲最著，至今學者稱焉。

また、見思と聖嘆との交遊関係に関する記述も無名氏の『史記論文跋』に見える¹⁷。

吳齊賢先生爲吾郡名宿，多讀書論古，能自出手眼，識解獨高，與吳門金聖嘆齊名，亦相雅善。（『史記論文・跋』）

このように、呉見思と金聖嘆との交遊を確認することはできるが、見思は必ずしも聖嘆のすべての文学主張に賛同しているわけではなかった。特に聖嘆の「

唐詩分解」論には否定的態度を示している。たとえば、見思は『杜詩論文・凡例』の中で、次のように書いている¹⁸。

杜詩從橫變化，必有一定之法以求之，是膠柱之瑟、刻舟之劍也。（章法）

吳見思は杜詩が非常に變化に富んでいるため、ただ一つの作文法によつて杜詩を評價するのはとうてい無理なことであるという。見思のそうした見解は後の『史記論文』にも見える。彼は「文無定法，亦無定姿也。」（第13冊卷65）と述べ、やはり固有の「作文法」をもつて文章を当てはまることに對し反對の態度を示している。そうした見地から、見思はまた聖嘆の「唐詩分解」論（正確に言えば唐律詩についての「四句一解」「二分法の主張」と異なつた意見を打ち出した。見思は杜詩を吟味したうえで、細かい分類の作業を行つていた。次に見思が分類した「五言律詩」と「七言律詩」のいくつかのパターンをまとめてみよう。

【五言律詩】

- ・有通首一氣者
- ・有上下四句者
- ・有上一句下七句者
- ・有上二句下六句者

- ・有上六句下二句者
- ・有上七句下一句者
- ・有前後四句中四句者

【七言律詩】

- ・有八句一氣者
- ・有上下四句者
- ・有上一句下七句者
- ・有上二句下六句者
- ・有上六句下二句者
- ・有上七句下一句者
- ・有八句三段者

見思の律詩についての分類は聖嘆の「四句一解」という二分法と異なる。内容によつて律詩の形式は必ずしも「四句一解」というワンパターンではない多くの例をあげることによつて、間接ながら金聖嘆の「唐詩分解」論に對する否定的態度を示している。また、「才」についての解釈も聖嘆趣向とも異なる¹⁹。

得之於天者才也，取之於古者學也。（『杜詩論文・凡例』）

これも聖嘆の「才之爲裁」「才之爲材」の議論と明らかに異なっている。しかしながら、見思は聖嘆のすべてを文学理論を排斥したわけではない。彼は聖嘆の友人

であると同時に、批評家として聖嘆の文学理論を批判的に吸収しながら、独自の文学論を打ち出そうとしていた。彼はまさにそのような心情を持って『史記論文』に心血を注ぎ込んだのである。

ここで特に注目すべきことは、呉見思は『史記』を「小説」としてとらえようとするところである。見思には次のような議論がある²⁰。

此文純以一氣旋運，借諸公組織於中，非因事成文，反若因文生事，故並不見其多人也。（孟子荀卿列傳）
引用文の下線は筆者によるものである。下線部分の議論は金聖嘆の小説論を想起させる。次の聖嘆の『水滸傳』批評内容と比べてみよう²¹。

其實史記是以文運事，水滸是因文生事。以文運事，是先有事生成如此如此，却要算計出一篇文字來，雖是史公高才，也畢竟是喫苦事。因文生事即不然，只是順着筆性去，削高補低都由我。（讀第五才子書法）
聖嘆の議論は史書を小説と区別するために、『史記』を「以文運事」と、『水滸傳』を「因文生事」と限定して議論を展開している。見思は「因文生事」の批評用語で『史記』を批評し、明らかに聖嘆の小説についての概念を史書批評に取り入れている。聖嘆は「因文

生事」の論理によって小説を史書と同等な価値・地位に向上させようとした。一方、見思は「因文生事」の論理によって史書を小説と同等な地位にさせようとしている。これは史書の史実記録を否定する意味ではなく、『史記』は史実の記録である前に、まず優れた文章であると強調したのだと考えられる²²。

史記雖序事，而意在作文，其中許多人，許多事，不過供我作文之料耳。故或前或後，或散或合，或花分或搏掬，極我文章之妙，而其事既傳已。（酷吏列傳）

ここでは、歴史における多くの人物や事件は文章の材料を提供したに過ぎなく、それらの材料を使って文章の醍醐味を極めているうち、史実がひとりでに伝えられたという。まず、文章が重要であり、史実記録はその次ぐ、というのが見思の考えである。

更に、見思は『史記』に「虚構」があることを次のように指摘している²³。

○自楚人弱弓微櫓，至此是一篇。此是文人虚空結撰文字耳，然雄奇絕世可爲擊節。（楚世家）
○史記俱借事行文，此獨是司馬公憑空幻出一人，造出一篇文字，屬當日士大夫。故回環轉折，極爲盡意。

（日者列傳）

すなわち、『日者列傳』については、見思は『史記』がすべて文章を作るために事柄を利用しているに過ぎず、なかでもこの『日者列傳』は司馬遷の虚構であるという。『楚世家』についても、見思はこれが文人の虚構であるという。見思のいう「借事行文」は「事」が客、「文」が主という関係であり、聖嘆のいう「以文運事」は「文」が客、「事」が主である。見思における「事」と「文」との関係についての認識は、史実重視より文章重視に重心が移っている。ここで彼が使った「憑空幻出」「虚空結撰」のような批評用語は聖嘆の小説、戯曲批評によく見受けられる。たとえば、

○宜和遺事具載三十六人姓名、可見三十六人是實有。只是七十回中許多事迹、須知都是作書人憑空造謊出來、如今却因讀此七十回、反把三十六人都認得了。任憑提起一個、都似舊時熟識、文字有氣力如此。（『讀第五才子書法』²⁴）

○右第四節寫張生遊寺已畢、幾幾欲去、而以外出奇、憑空逗巧。（『西廂記』卷之四）²⁵

とあり、文中の「憑空造謊」「憑空逗巧」は「憑空幻出」「虚空結撰」と同じく「虚構」という意味で使われている。これ以外にも、見思は「虚實」論を展開している。次にいくつかの論点を整理してみよう。

虚事實寫、實事虚寫 「虚事實寫」とは実際に存在しないこと、或は伝説のことを実際にあつたように見せかけることであり、一種の「虚構」の手法である。そのためにリアルに書くのが特徴である。言わば一種の「詳寫」である。「實事虚寫」とは史実（或は事實）をフィクションの素材として扱うため、材料の取捨によつて漫画風に書く場合が多い。言わば一種の「略寫」でもある。従つて「實事虚寫」は見思における「虚實」論の重点であるといえる。²⁶

○虚事實寫、實事虚寫、此行文之妙、寫孫武只此試美人一事、是史公好奇處。（孫子吳起列傳）

○遊齊適梁、實事只用虚寫、作慨嘆語。（孟子荀卿列傳）

○田嬰事只略寫、虚寫、蓋下有孟嘗事、恐頭重也、附傳體如是。（孟嘗君列傳）

孫武の例については、宮女たちを訓練する際、命令が聞かない宮女を軍法にかけて処刑したことで、宮殿中を震撼させたと書くことで、孫武の軍事家の性格を鮮明に描いた。しかしこれは事実かどうか分らない。伝説に過ぎないかもしれないが、孫武の性格を表現するには最適な材料であるため、司馬遷に採用された。孟子の場合、かれは齊や梁を遊説したが、いずれも国

王たちに起用されず、失意に終わった。この史実部分はごく短く記されているのは孟子のために嘆くのである。孟子についての「虚寫」は「略寫」の意味で使っていることがよく分かる。田嬰についての記述は「頭重」を恐れ、すなわち文章全体のバランスをとるために、「略寫、虚寫」をするのはやむを得なかったという。ここでは「略寫」と「虚寫」は同義語として使われていると思われる。

先虚後實、先實後虚 しかしながら、見思は「虚寫」を重視する一方、「實寫」とのバランスも見逃していない。たとえば、

此乃實序吳兵初來以至入郢之事，作兩重寫，前城郢則先實後虚，此則先虚後實。（楚世家）

先引一段，洋洋灑灑，必有一篇大文章在後，乃三日夜之所陳，竟無一字。實而虚，虚而實，文章之妙，如是如是。（孟子荀卿列傳）

とあり、「虚」と「實」を交互に轉換しながら作文するのは文章醍醐味の一つであるという²⁷。「先虚後實」、あるいは「先實後虚」は前後の順番の問題はそれほど重要ではなく、文章の「疎密」や「繁簡」の均整をはかるのが目的である。さらに紋切り型のような文章ではなく、ダイナミックで、起伏のリズムを感じさせる

ような文章を書くためにも、「先虚後實」「先實後虚」の手法が欠かせないものである。たとえば、

後乃一跌，作三比法。前兩贊虚，此一跌實。（春申君列傳）

一恩一怨，先實寫須賈，虚寫魏齊；此實寫王稽，虚寫鄭安平。（范雎蔡澤列傳）

というような例もある²⁸。

「虚寫」の色々 「虚寫」の手法については、前掲した「先虚後實」、「先實後虚」のほかにも色々ある。

見思の批評では「筆法」と称するものも「虚寫」の手法と見なされている。二、三の例を見てみよう²⁹。

(1) 「伏筆」

○籌畫虚說妙。蓋已爲滕公說一遍，直述兩遍，無此文法，先於滕公前述過，下無色澤。故且藏過至下方說，作文法也。（黥布列傳）

○虚一句藏許多事，即伏下說齊事。（酈生陸賈列傳）

文中の「虚說」や「虚一句」はすなわち後の出来事を伏せておくという意味であり、すなわち先に「略寫」をして、後に「詳寫」をするということである。

「虚寫」の手法の一つとして考えられている。

(2) 「省筆」

周勃一生大事，反用省筆，實事虚寫。（絳侯周勃世

家)

ここでの「省筆」は「實事虚寫」と解釈されている。すなわち「省筆」はイコール「虚寫」である。「虚寫」は「省略」「簡略」の意味合いをもっているのが前の「略寫」と一致しているのである。

(3)「補筆」

○補寫郡縣爲陳涉添幾許氣勢，文有虚而實者，此類是也。(陳涉世家)

○秦始皇爲人性情，篇中不序，前借尉繚，後借盧生口中補出，尤爲神妙。(秦始皇本紀)

陳涉世家の例では、各郡県の民衆の蜂起を補って書くのは、陳涉の反乱軍の威勢をよりリアルに際立たせるためである。いわゆる「虚而實」は一種の「虚寫」である、と見思はれている。秦始皇本紀の例では、いろいろな人たちの角度から始皇帝の人柄や性格を語らせるのはより立体的に始皇帝という人間が見えてくるからである、と見思は分析している。

(4)「襯筆」

○季布一傳正寫處，只折樊噲對文帝數語，餘則借周氏，借魯朱家，借滕公，借曹丘生，四面襯貼，而季布節概無不現出，此綠葉扶花之法也。(季布欒布列傳)

○汲長孺在漢廷是第一流人物，其憨直犯顏處，極好鋪張。史公偏借武安侯，借莊助，借大將軍，借張湯，借公孫弘，借淮南王，借司馬安，反從他人身上形容出來。而汲長孺意思情性，氣概節誼無不全現，反強於只寫一汲黯。如畫家寫像，絕無神氣也。此所謂綠葉扶花之法。(汲黯列傳)

季布についての描写だが、「實寫」ではなく、他の人たちの描写を借りることによって引き立たせる。汲黯についての描写も同じ手法であった。このような手法はふつう「襯筆」というが、見思流の言い方では「綠葉扶花之法」である。前に述べたように見思は機械的な「文法」に反対するために、極力「法」という言い方を避けてきたが、ここでは珍しく「法」という言い方を使っている。従って彼の文学批評の中では目立つ存在である。一方、「襯筆」のことは見思の「虚實」論の重要な一部として如何に重視されたかが物語っている。なお、「襯筆」には「反襯」という手法もよく使われる。たとえば、

寫荊卿，先寫其柔懦，寫秦舞陽，先寫其勇敢，皆反襯法也。(刺客列傳)

「反襯」という手法によって荊軻や秦舞陽性格の真実の一面をより克明に表現できたのである³⁰。

四

呉見思の「虚實」論の中に、最も重点が置かれているのは「虚寫」と言えよう。彼の「虚寫」には基本的に「虚構」と「省略」との二つの意味を内包している。それに対し、「實寫」は「実録」、「詳細」の意味が含まれている。

「虚寫」は少ない筆墨を以つて効果的に事件や人物を描写することができる。従つて「簡潔」の文章が出来るといふわけである。これは見思が大量な筆墨を費やして文章の「虚實」を論じた最大の目的である。

実は前述べた見思の「頰上三毛」の議論にも「俱約略虚寫」といい、「虚寫」と「文簡」の密接な関係を明確に述べている。具体的に言えば、呉見思の文章論は實寫(手法)↓詳(内容)↓繁(結果)、虚寫(手法)↓略(内容)↓簡(結果)という図式が構成されている。例えば、彼は『左傳』詳盡、此用簡法。』(魯周公世家)と³⁰、『左傳』の内容が詳細だから、ここ『史記』では「簡法」を用いて簡潔な文章にするという、明らかに「詳盡」(詳細の意)という言葉集を「簡法」と対応して使っている。さらに、見思は「説令事

亦不細寫，莽莽蒼蒼，只具大概，文以疎爲妙，此等是也。」(鄧生陸賈列傳)とも述べており、「文以疎爲妙」を明確に主張している³¹。ここでの「疎」とはイコール「簡」である。こうして見ると、呉見思の「虚寫」についての議論は孫月峰から受け継がれた「文簡」論と乖離したものではなく、むしろ密接に融合したうえ、新しい「文簡」論を展開したと言ふことができる。孫月峰の「文簡」論と比べ、呉見思の「文簡」論の最大の特徴は、金聖嘆の小説虚構論を取り入れることによって、史書というジャンルを超え、より普遍的意義を持たせる文章論になったという点にある。従つて彼の主張は孫月峰「文簡」論を継承したうえで、さらに発展させた新しい文章論と言つてもよからう。

ただし、見思は決して「實寫」や「繁」(あるいは「密」)を完全に否定しているわけではない。彼は「兩傳俱空寫，即朱家有季布一事，亦作花香月影在有無之中。而郭解一傳方用全力，此虚實相生，疎密相間之妙也。」(遊俠列傳)と述べ³²、むしろ「實寫」を「虚寫」に巧みに組み込むことによって、「虚實相生」「疎密相間」という相乗効果を期待している。また、見思は「文無定法」と主張するのも決して一律に「文法」否定することではない。機械的な「文法」は本末転倒

の形式主義である。「文法」(筆法も含めて)は見思の批評の中に「虚實」論によって再発見されたものであり、その理論体系の中に巧妙に組み込まれているのである。

注釈：

- (1) 張惟驥『毘陵名人疑年録』卷一、常州旅滬同鄉會刊行、民國33年11月、東洋文庫藏本、以下同じ
- (2) 吳見思『史記論文』(尺木堂藏版)、内閣文庫藏本、以下同じである。『史記論文・跋文』の執筆者である「萬樹」という人は不詳である。『跋文』には、兩廣總督吳興祚に対し「門生萬樹」と自称していることから見ると、「萬樹」という人が吳興祚の門下生、或は幕僚と推測される。
- (3) 張慧劍『明清江蘇文人年表』p 814、858、上海古籍出版社1986年12月、以下同じ
- (4) 張慧劍『明清江蘇文人年表』p 210
- (5) 吳中行『賜餘堂集』卷十、内閣文庫藏本
- (6) 吳見思『史記論文』第8冊卷39、第19冊卷98、97
- (7) 吳見思『史記論文』第2冊卷5、第11冊卷47
- (8) 吳見思『史記論文』第7冊卷32
- (9) 吳見思『史記論文』第1冊卷4

(10) 吳見思『史記論文』第14冊卷69「國策語尚繁」については「夾批」の形式であり、『史記』原文は「以秦士民之衆、兵法之教、可以吞天下、稱帝而治。夾批

(引用文)」とある、第14冊卷75、76

(11) 吳見思『史記論文』第21冊卷111

(12) 吳見思『史記論文』第7冊卷32、第12冊卷57

(13) 『晉書』卷92「嘗圖裴楷像、頰上加三毛、觀者覺神明殊勝。」とある。

(14) 吳見思『史記論文』第9冊卷41、第15冊卷73

(15) 吳見思『史記論文』第3冊卷8、第4冊卷9

(16) 閔爾昌『碑傳集補』卷44、上海書店影印本p 3645

(17) 萬樹『史記論文・跋』

(18) 吳見思注・潘眉評『杜詩論文』(岱淵堂校定本)、内閣文庫藏本、以下同じ

(19) 吳見思『杜詩論文・凡例』

(20) 吳見思『史記論文』第15冊卷74

(21) 『水滸傳會評本』上p 16、北京大学出版社1981年12月、以下同じ

(22) 吳見思『史記論文』第23冊卷122

(23) 吳見思『史記論文』第9冊卷40「自楚人弱弓微檄」についての批評は「夾批」の形式であり、『史記』の原文は「於是頃襄王遣使於諸侯、復爲縱、欲以伐秦、

秦聞之，發兵來伐楚。夾批（引用文）」とある）、第24冊卷127

（24）『水滸傳會評本』上P17

（25）『金聖嘆全集』（三）P46，江蘇古籍出版社1985年9月

（26）吳見思『史記論文』第13冊卷65、第15冊卷74（「遊梁適齊」についての批評は「夾批」の形式であり、『史記』の原文は「遊事齊宣王，宣王不能用。適梁，梁惠王不能果所言。則見以爲迂遠而關於事情。夾批（引用文）」とある）、卷75

（27）吳見思『史記論文』第9冊卷40、第15冊卷74

（28）吳見思『史記論文』第16冊卷78（「前兩贊虛，此一跌實」についての批評は「夾批」の形式であり、『史記』の原文は「歇乃上書說秦王曰：天下莫強於秦楚，（中略）今王使盛橋守事于韓，盛橋以其地入秦，楚王不用甲，不信威，而得百里之地，王可謂能矣。夾批：先贊。王有舉甲而攻魏，杜大梁之門，舉河內，拔燕，酸棗，虛，桃，入邢，魏之兵雲翔，而不敢掾，王之功亦多矣。夾批：再贊。王休甲息眾二年，而後復之。又并蒲，衍，首，垣，以臨仁，平丘，黃，濟陽，嬰城，而魏氏服王，又割濮磨之北，注齊秦之要，絕楚趙之脊，天下五合六聚，而不敢掾，王之威亦單矣。夾批（引用

文）」とある）、卷79

（29）吳見思『史記論文』①伏筆：第18冊卷91、第19冊

卷97，②省筆：第12冊卷57，③

補筆：第11冊卷48、第2冊卷6，④觀筆：第19冊卷100、第22冊卷120、第17冊卷86

（30）吳見思『史記論文』第7冊卷33

（31）吳見思『史記論文』第19冊卷97

（32）吳見思『史記論文』第23冊卷124